# 北 中 だ よ り

**学校教育目標「自ら考え なかまと磨き合う 北中」**

菊池北中学校
学校だより No5
文責 芹川博文
5月10日（金）

## 「背中で見せる」から伝わる中３の「覚悟」
### ～ ３年生 体育大会練習 始動の朝の話から ～

「全てにおいて手本となる。」ゴールデンウィーク明けの３年生の教室黒板に、担任の宮崎貴臣先生の文字がありました。続けて、「今回あなたたちは１，２年生を引っ張る立場です。『早くして』とか『声出して』と言わなくても、３年生が行動で示し、背中で見せることで１，２年生がついてくる、これが理想です」との言葉。連休明けの「重たい空気」はなく、３年生としての覚悟が感じられました。

そして３時間目。いよいよ最初の全体練習。生徒会長、赤白の各団長の言葉から始まりました。３人とも長い文ではありませんでした。しかし、原稿を見ることなく、自分の言葉で決意を伝える姿が印象的でした。学校目標の重点の一つ「自分の言葉で」を行動で示してくれました。

これから様々な場面で「背中で見せて」くれるであろう３年生。ダンスや看板など春休みから準備を進めてきた彼らにとっての中学最後となる体育大会は、５月１９日（日）が本番です。

## 「モップで掃除するから 床がこんなにきれいなんですね」
### ～ 何を使って磨くかも大切だと感じた ２０年目を迎える北中の木造校舎 ～

「モップで掃除するから床がこんなにきれいなんですね。」これは今年度赴任された先生の言葉です。同時期に建てられた前任校の学校では、雑巾で水ぶきしているためか床のツヤがなく、北中の床の光沢に驚いたとのこと。

かつて床の掃除は雑巾がけが当たり前でした。しかし床の材質（ニス？）等を考えてか、「北中はモップで掃除しよう」と決断されたのでしょう。

当時は思い切った決断だったかもしれません。しかし、その決断のおかげで、２０年目を迎えた今も、木造校舎の床は光っています。

将来を見通して何によって磨くのかを考えることの大切さを再認識するとともに、今後も木造校舎を大切していく責任を感じました。

## 「待つ」ことの大切さ ～ 北中にも飾られている星野富弘さんの詩画より ～

北中の職員玄関近くのトイレには星野富弘さんの詩画が飾ってあります。星野さんは２４歳の時、中学校の体育教師として指導中に頸椎を損傷して四肢マヒし、その後、口に筆を加えて花の絵や詩を描き続けられました。先月７８歳で亡くなられた星野さんの文を紹介させていただきます。

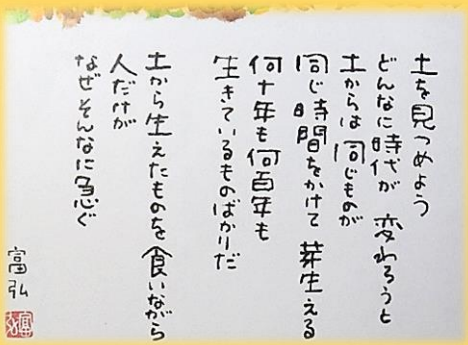
便利な世の中になりました。いかに簡単に、速くできるか、現代社会はそればかりを追い求めてきたように思います。そして、その中で、遅いことがまるで悪いことであるかのように錯覚しているのではないでしょうか。

ストレス社会、キレる子ども。以前はなかったことばです。いつの間にか私たちは「待つ」ということを忘れてしまったのではないかと。「待つ」ことには楽しみもあるのです。夢は待っている間に膨らんでくるのです。

たとえば、花には花の時間があります。

種をまき、芽が出て、やがて花が咲く。

人間がいくら早く咲かせようとして、つぼみを無理やりこじ開けても、枯れてしまうだけです。　（「いのちより大切なもの」星野富弘 著より）



（北中に掲示されている詩画の一枚）

子どもたちの成長を楽しみに待ちながら、５月の一日一日を味わえたらと思います。